

山形から東京へ3年目

ー現場の思いを忘れずにー

ふなやま ひとし
船山 整

●自治労・総合企画総務局長

2015年9月に、自治労本部役員として東京に来て、早2年8か月が過ぎました。50代の半ばも過ぎ、山形の田舎から出て初めての東京生活で、慣れたといえば慣れてしまったとも感じますが、やはり、50年以上暮らした山形の四季折々の気候風土が、自分には合っているように思います。今年の冬は、山形県内も、例年にない大雪で、かつ最低気温がマイナス10度を下回る日も多く、いつもより寒さの厳しい冬でした。東京も1月に一度「大雪」が降りましたが、山形の雪に比べれば、驚くほどのものではありません。

3月に入ると、山形県内も気温の高い日が続いたので、一気に融雪が進み、4月の桜の開花も例年よりも早まりました。雪が融けてしまうと、あの冬の大雪はなんだったのかと遠い昔のように思ってしまいます。「喉元過ぎれば……を忘れる」ということわざそのものです。私の実家は、山形市に近く県内でも少雪の地域ですが、それでも1月には、家族から大雪でのSOS発信があり、特に積雪が多かった1月末から2月中旬にかけては、毎週帰省し、雪片付けに追われました。若いころは余り感じなかった雪の重みも、最近では体にずっしりとこたえるようになり、筋肉の痛みがしばらく残りました。

東京で暮らしていると、雪のない生活に慣れてしまい、雪国生活の苦労を忘れてしまいがちになります。日本国内、自然条件は地域それぞれで、決して、雪の生活だけが大変だとは思いませんが、11月から3月ぐらいまで、ほとんど毎日のようにどんよりとした日本海側特有の鉛色の雲に覆われ、長期間、雪とのたたかいを強

いられる生活は、経験した者しかわからない厳しいものがあります。それだけに、雪が融けて、春が訪れるときの、なんとも言えない心地よさ、ホットとする感じは、格別のものがあります。

さて、自治労本部では、初めの2年間は組織担当、3年目の現在は、総務企画部門（国際、報道も含む）を担当しています。組織担当のときは、県本部や単組に足を運び、組合役員等と直接対話する機会も多かったのですが、今のポジションは、出張は少なくなり、現場から遠ざかった感がしないでもありません。しかし、その分、連合、他産別、外部団体等、自治労の外に出る機会が増えました。また、国際関係の労働組合・団体や他国の労働組合との交流の機会も増えました。自治労としての運動領域の広さも実感しています。この間、スウェーデンやシンガポールの公務員労組など自治労が定期交流をしている海外の仲間も受け入れました。実際交流して、抱えている共通の課題や、政治的分野も含めた自治労が学ぶべき課題も見えてくることがあります。それは貴重な経験です。しかし、一方で、役員として、現場の組合員の実態や思いから遠ざかってはいけないと思っています。世界にも目を向ける幅広い視点と組合員の現場の実態、両方の視点のバランスを保つことが大切だと感じています。

東京に来て、もともと好きなジョギングを楽しむため、皇居ランなど、仲間と汗を流しています。雪国での生活や、組合員の現場での苦労も忘れずに、これからも、微力ながら労働運動に取り組んでいきたいと思えます。